

在日台湾人女性の留学・結婚・子育てのライフストーリー

ー日本・台湾の社会状況と当事者の主体性ー

中村香苗 (淡江大学)

1. はじめに

本研究では、1980年代後半に日本へ留学し、その後日本人男性と結婚、日本で子育てをした3人の台湾人女性の語りから、当時の日本と台湾の社会状況と、その中で当事者として人生の選択をしてきた女性の主体性を明らかにする。本研究を開始するきっかけとなったのは、筆者が2019～20年にかけて実施した、台湾の大学の日本語学科に在籍している日本育ちの日台国際児（いわゆる、『日台「ハーフ」』学生）へのインタビュー調査であった。アイデンティティの形成と変容をテーマに、5人の日台「ハーフ」学生に子供時代の経験や台湾留学以降の意識の変化などを聞いた結果、5人中4人が中国語の継承語教育を受けずに育ったこと、台湾へのルーツやアイデンティティをあまり強く（あるいはまったく）感じずに成長し、来台後もアイデンティティの変容があまり起こっていないことが明らかになった。筆者はその原因として、日本社会の同調圧力や外国にルーツを持つ子どもへの関心の低さとともに、当時の台湾における「海外移住への志向」や「先進への憧憬」（塩入 2019）から、台湾人親が積極的に台湾の言葉や文化を教育する意識がなかった可能性を指摘した（中村 2020）。本研究はその真相を追究するために、当時インタビューした学生のうちの3人の台湾人母に話を聞いた結果である。

2. 調査方法

調査対象の台湾人女性には、上述の日台「ハーフ」学生を通してインタビュー協力を依頼し、承諾を得た後、再度LINEで筆者から趣旨を説明した。調査対象者が日本語の非母語話者であることと調査内容が20年近く前のことであることに鑑み、インタビューの数日前に研究同意書とともに質問リストを送っていただいた。質問リストには、「日本へ行った経緯」「結婚について」「第一子の子育て」（「第二子の子育て」）「日本での子育て全般」「現在の日本と台湾について」というカテゴリ別に複数の質問を用意した。

インタビューは2021年1月～4月にかけて、LINEの通話機能を利用し²、半構造化インタビューの形式で実施した。対象者の中には回答をメモに書いて用意していた人もいたが、会話はくだけた雰囲気が進み、ただメモを読むという答え方をした人はいなかった。インタビューは日本語のみで行い、それぞれ1時間20～40分話を聞いた。会話を振り返ってさらに気になったことは、後日LINEで質問しテキストで回答を得た。

会話はすべて文字化し、ライフストーリー研究（桜井 2002）の枠組みで検証する。本研究で扱う語りは、すでに子育てが一段落した台湾人女性たちの「完結した物語」（秦・岡本・井出 2017, p. 19）である。彼女たちの語りから浮かび上がる1980年代後半～2000年以降の日本および台湾の社会状況や規範に注目すると同時に、そのような状況下で人生の岐路において自身が取った行動を、彼女たちがどのように語り、どんな評価をしているのかを明らかにする。

3. 調査対象者

今回インタビューした3人は、ほぼ同時期に私費の語学留学生として来日した。それぞれAさん、Bさん、Cさんとし、来日の経緯や進路、家族構成や子供の教育の概要を表1にまとめる。

¹ 5名の日台「ハーフ」学生の家庭は、いずれも父親が日本人で母親が台湾人である。

² 3名とも最初はビデオ通話で話していたが、電波が安定しないために途中で音声のみの通話になった人もいる。

表1 調査対象者の概要

	来日時期	来日の経緯とその後の進路	家族	子供の教育
Aさん	1989年頃	台湾の夜間高校→東京の日本語学校→日本の専門学校→台湾で就職→結婚を機に再来日(1995年)	夫, 長女*, 長男	長女: 日本の小中高校→台湾の大学 長男: 日本の小中高校→日本の大学 2人とも子供の時, 補習校や個人教授で中国語を勉強した.
Bさん	1988年	台湾の大学→台湾で就職→東京の日本語学校→日本の大学院→大学院卒業後に結婚	夫, 長女*	日本の小中学校→高校の国際科→台湾の大学 高校の第二外国語が中国語で夏休みは台湾へ短期留学も.
Cさん	1989年頃	22歳→東京の日本語学校→日本の大学→大学卒業後に結婚	夫, 長男, 次男*	長男: 台湾の幼稚園と小学校→3年生で日本の小学校へ→日本の私立中高校→台湾の大学→日本で就職 次男: 日本の公立小中学校→スポーツで県外の高校へ→台湾で語学留学から大学進学

*がついている子供は、以前筆者がインタビューした学生。子供の最終進路は調査当時のもの。

3人とも来日した年を正確に言えない代わりに、「ちょうど天皇陛下と美空ひばりが亡くなった年(その前年)」という覚え方をしていた。そのため1988年から89年頃に来日したと思われる。全員東京の日本語学校で1~2年間勉強し、その後東京近郊の学校に進学した。Aさんは卒業後台湾に戻って就職した後に、BさんとCさんは卒業後すぐに、日本人男性と結婚し、東京近郊に住んで仕事をしながら、家庭では主に子育てを担ってきた。

筆者は、3人の子供たち(とCさんの長男)を授業で教えたことがある。これにより3人の母親たちが筆者に対して遠慮してしまう可能性もあったが、インタビュー会話を見る限り、子供のことを筆者が把握していることによってむしろ話が弾んだと思われる場面も見受けられた。また、筆者の台湾在住歴が長い(当時16年目)ことや日台「ハーフ」児の親であるという点も、ラポール形成に役立っていたと思われる。

4. ライフストーリー分析

本節では、3人の台湾人女性の語りを主に「解釈的客観主義的アプローチ」(桜井 2002)により検証する。本研究では特に、来日前から来日直後、進学、卒業時、結婚および第一子幼少期の子育てまでの語りに焦点を当てる。以下の文中では、キーワードや先行研究の引用は「」内に、調査対象者の語りの引用は<>内に斜字で記す³。

4.1 留学までの経緯

台湾は1987年に38年間続いた戒厳令が解除され、それ以降民主化が進んでいく。1989年には政府の「国外留学規定」が撤廃され、それまで<国費留学生もしくはお金持ちのおうちしかそういうチャンスが与えられなかった>(A)留学に、誰でも自由に行けるようになった(呉 2011)。

Aさんはちょうど当時付き合っていた彼がアメリカの大学進学を決めたことを機に、<自分も留学したいな>と思い、<アジアの方が近くて何かあっても帰国しやすい>く、遠い親戚もいたので、日本へ留学することに決めた。

Bさんは大学時代に日本からの交換留学生と仲良くなり、<その時から卒業したら日本へ留学したいなって><決意>し、4年生の時に親に告げた。<家庭が裕福ではない>が、<大丈夫ですよ、私日本で勉強しながらバイトします>から<ぜひ行かせてください>と親を説得した。半年間会社勤めをしながらYMCAで日本語を勉強したが喋れるようにならず、<もう時間がないから東京の日本語学校で勉強するしかない。そういう覚悟で>来日した。

Cさんは当時父親が日本と関連のある仕事をしていたため、弟には日本語の家庭教師をつけていたが、Cさんは<女の子が嫁に行くから必要ない>と習わせてもらえなかった。でも<20(歳)の時に外国に行くのブームがあつて>、同級生と<いいねいいねっていう話になって><ちょっと(日本語の)塾でも行ってみようかな>と半年くらい通った。その時、日本人の先生が東京で親族の経営する日本語学校を紹介してくれて、<急に(留学が)降って来たという感じで>友達と来日した。

4.2 来日当初の生活

³ 調査対象者の言葉には助詞などの文法的誤用が多見されるが、意味理解に支障がない限りそのまま引用する。

3人が来日したのは、ちょうど「留学生10万人計画」で日本が留学生を積極的に受け入れつつあった時期である。しかし当時の3人の生活は、決して楽とは言えなかったようだ。

Aさんは<高校も夜間高校通いながら生活費を稼いで、学費とかも含めて親は高校になったら自立しなさいよって考え方の親なので>、高校時代に貯めたお金を資金として来日した。当時は<本当に明日の光熱費どこにあるの>か、<分割して払わなきゃいけない学費とか生活の中でいっぱいだったの>で、ほんとに周りの環境をゆっくり見る暇もなかった。

Bさんは、最初は日本人と結婚した母親の友人の家にホームステイさせてもらったが、3ヶ月後にそこを出て、勉強しながら<全部自分でバイトして家賃を>払う生活をした。当時は<友達も少ないし>けっこう大変で、<今考えれば無謀だった>し、<すごい苦勞した>。

Cさんは同級生と一緒に来日して、親切的な日本人に1ヶ月ほど生活面の世話をしてもらったが、その人がいなくなった後は<自分で頑張っていけないといけな>かった。一括払いの学費も自分と友人だけは1ヶ月ずつ分割払いにしてもらった。

4.3 日本語学校修了後の進路選択

Aさんは2年間日本語学校に通った後、<本当は大学に行きたかった>けど<学費が高いので、まあ4年間もかかるし専門学校でもいいかなと軽く考えて>美容系の専門学校に進学した。<今になってあの時苦勞していてもうちちょっと頑張っただけでも行けばよかったなって>後悔している。

Bさんは、留学を決めた時から大学院進学を目指していたため、日本で日本語能力試験1級を受けて、私立よりも学費の安い国立の大学院を選び、某大学院の環境科学系の教授に手紙を書いて自己アピールした。教授との面接を経て、まず研究生として入り、後に試験を受けて正式な大学院生となった。

Cさんは、日本語学校の1年目が終わる頃に友人が体調を崩して台湾へ帰ってしまったが、自分は<1年間ちょっと物足りないかなと思って>先生と相談し、その時留学生の受け入れが初めてだからたぶん入りやすいだろうと勧められた某私立大学に願書を出した。大学の学費は高かったが、<自分で来るのは自分で決めたものなので、親にお金かけてもらうというのが私はちょっと嫌>なので、アルバイトをしながら大学に通った。

4.4 卒業後の人生選択

進学先を卒業する時期になり、3人の語りからはそれぞれに希望する進路があったにも関わらず、当時の社会の制約や規範から異なる決断をしなければならなかったことが窺える。

Aさんは、専門学校卒業後、日本に残ろうと思ったが、<ビザの関係で当初は今と違って昔そんなに外国籍の人に受け入れのお皿はあまりなかった>ので、台湾に帰って貿易会社に勤め、仕事を通して知り合った日本人男性と結婚、1995年に再来日した。

Bさんは大学院入学前から付き合っていた日本人の彼と、卒業する時<結婚するか、結婚すれば日本に残る？で台湾に帰るか、それすごい迷って>いた。環境科学は<当時一番就職できる学科>なので、<台湾に帰ればその時たぶんいい就職が待って>いた。日本で就職活動もしたが、当時外国人の就職は難しくはないが、<外国人の女性、でしかも理工系？理工系の就職は女性には優しくな>かった。<面接する時もはっきり><いや、あの入っててもお茶汲みですよって>言われた。それで、今の夫に<もう就職しなくていいよ、結婚しよう>と言われ、自分の専門の就職は<諦めて>、貿易会社の事務系の仕事に就き、結婚した。

Cさんも当初は<日本に住むつもりはなかった>。<大学卒業してから向こう(台湾)で就職しようかな>と思っていた。しかし在学中から付き合っていた彼がいい人で、金銭的にも問題がなく、自分のことも大事にしてくれた。当時は国際結婚をしても不幸な人は周りにたくさんいたが、<愛されたの方が自分で愛するよりは私は捨てられないかな>と思った。年齢も28歳だったため、自分の両親からも<もういいよ、女の人が逆に結婚しかないんだらうってそういう風に言っていたので、仕事いつでもできるんじゃないかな>と考へ、結婚することにした。

4.5 第一子の育児方針

第一子を出産した3人の中国語教育に関する考え方、実践方法は三者三様であるが、それぞれに置かれた環境で最善を尽くそうとしたことが窺える。

Aさんは主婦で<世界(との)あの接点がな>かったのので、友達や情報を得るために地域の日本語教室に通い、そこで外国人や台湾人妻の先輩たちと友達になった。しかし彼女たちが自分の日本語上達のために子供に日本語で話しかけているのを見て、<せつかく自分は台湾人なのに子供達は中国語も台湾語も話せない先輩たちをいっぱい見て来たので、自分その時まだ妊娠しなかったんですけど、子供できたら言葉だけ絶対教えたいなっていう風に>思った。長女が生まれてからは、台湾の親に頼んで中国語教材や国語の教科書を送ってもらい、家でボポモフォ(漢字の読み方の記号)などを教えた。夫や夫の家族からは子供が混乱するからと反対されたが、自分のやり方を通していたら子供が<いつの間にか使い分

けるようになって来た時期が来た>ので、夫も何も言わなくなった。

Bさんは、<最初はやっぱりせつかく国際結婚だし、で中国語とか日本語両方マスターさせようと思っ>たが、当時は<国際結婚の子供達のいじめ問題もあって>、夫に<日本人として育てたいから中国語はやめましょって言われた>。自分も<実際いじめられるのはママのせいだったらすごい嫌>なので、<この子を日本人として育ちながら自分も日本人らしく、ママが台湾人だからどうのこうのって言われないように色々気をつけた>。

Cさんは長男の時は主婦で、周りの母親たちの影響もあって<教育ママみたいな感じ>になり、幼稚園から色々な習い事をさせた。また<やっぱりお母さん台湾の人なのでできれば子供もやっぱり喋ったりとかわかるようにして(なって)欲しいという>気持ちで、<環境が十分必要かなと思っ>小さい時からよく台湾へ連れて行った。当初、長男は<6年生まで(台湾の学校に)行けばまあこっち戻って日本語なんとかなると思っ>たが、自分の両親に預けていた長男が反抗的になってしまったので、3年生から日本に連れて帰った。それで4歳下の次男の時は、夫も自由にさせようと言い、自分もちょっと考えて<けっきょくS(長男)に力いっぱい入れすぎちゃったので、今度H(次男)の方には逆に何もしなかった。>

5. 考察

1987年に戒厳令が解除された台湾では、それまでエリート層にしか開かれていなかった留学が経済的に裕福とは言えない家庭の若者にも可能になり、AさんやCさんのように漠然と「外の世界を見てみたい」という夢を抱く若者も現れた。そんな夢を叶える上で、地理的に近く留学生受け入れを推進していた日本は、最適な留学先であった。しかし、当時の台湾には「(ある一定の年齢になったら)子供は経済的に親に頼るべきではない」とか「女子に高い教育は必要ない」などの考え方も強く、子供自身も「留学は自分で決めたことだから」という強い意思でアルバイトをしながら生活した。卒業後の進路選択時は、当時の日本社会で外国人の就業の門戸が狭かったことや、女性の結婚適齢期に関する社会通年などが、結婚および日本定住という決断に大きく影響した。子育てでは、台湾人女性には共通して中国語を教えたいという希望があったものの、夫側の考え方や日本での外国ルーツの子供の受容状況から実際に実践したかどうかは人それぞれだった。

以上のように3人の台湾人女性の留学、結婚、子育ての過程には当時の台湾と日本の社会状況や規範が様々に反映されている。しかし、彼女たちはただ受動的に人生を歩んできたわけではなく、むしろ留学に対する<決意>や<覚悟>(B)、<自分で決めればもう自分で責任を持つ>(C)結婚への態度、<堂々と自分(の)母親台湾人ですよと言えような子供に育てほしい>(A)という願い、あるいは<子供は日本人として育てたい。で、だから自分も日本人らしく生活したいって覚悟>(B)など、その都度3人が主体的に選択した結果であることが語りの中に表れていた。

6. おわりに

本研究では、1980年代終わりから1990年代を私費留学生として東京近郊で過ごし、その後日本人男性と結婚して日本で子育てをした台湾人女性3人のライフストーリーを分析した。子供へのインタビューから推測された結果とは異なり、3人の女性たちは決して海外移住の志向が強かったわけでも、子供に中国語を継承させたくなかったわけでもないことが明らかになった。実は、今回提示できなかったライフストーリー後半で、彼女たちは子供の言語教育や進路選択において様々な戦略的介入を行っており、子供の現在(調査当時)の進路や自身のこれまでの人生を概して肯定的に評価している。後半部分の語りはまた別の機会に論じたい。

参考文献

- 呉書雅(2011). 戦後の台湾留学生派遣政策の変容 広島大学高等教育研究開発センター大学論集, 43, 369-379.
- 秦かおり・岡本多香子・井出里咲子(2017). 出産・子育てのナラティブ分析—日本人女性の声にみる生き方と社会の形— 大阪大学出版会
- 中村香苗(2020). 日本育ちの日台国際児から垣間見える「日台関係」—台湾の日本語学科在籍生の成長経験から— 口頭発表 2020年文藻外語大学日本語学科国際シンポジウム「日本文学・言語・文化 移民時代の日本語」
- 桜井厚(2002). インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方— せりか書房
- 塩入すみ(2019) ロケーションとしての留学—台湾人留学生の批判的エスノグラフィー— 生活書院